

島のむんがたり

〜一五〇年前の
巨大イノシシとの格闘〜

今月号から、町史を採る様々な切り口をご紹介する新連載を、町誌編さん室よりお届けします。

今回ご紹介するのは、約150年前の島役人「仲為」が書き遺した古文書『仲為日記』に記されている巨大イノシシとの格闘の記録です。該当する部分を意識してご紹介します。

秀吉の「刀狩り」以来、「百姓」は武器を没収されたと言われてきました。近年の研究は江戸時代の村に鉄砲や刀があったことを指摘しています。

『仲為日記』からは同時代の島の人々も鉄砲や短刀を携え、狩猟をしていたことが分かります。

この頃の島の人々がイノシシによる農作物被害に悩まされていた

ぶんきゆう
文久3年（1863） 11月11

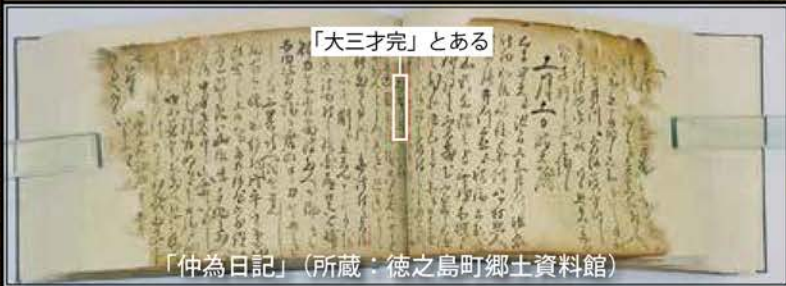
日（旧暦）の徳之島は晴天でしたが北東の風が吹いていました。

八つの村に動員がかかり、牢破りをした二名を山中で搜索していたところ、巨大イノシシ（日記では「大三才完」）が現れました。

何かの拍子によろめいたこのイノシシを亀津村の「貞徳」が木の枝で打ち倒し、それでも逃げようとするところを諸田村の「琉圓」が後ろ足を捕まえ、短刀で仕留めました。

この捕獲劇は豊臣秀吉の「文禄の役」の際、島津氏家臣の安田次郎兵衛が朝鮮半島で襲い来る虎を討ち取った故事のようです。

「大三才完」とある



「仲為日記」（所蔵：徳之島町郷土資料館）

かは判然としませんが、代官も含め狩猟は頻繁に行われており、狩りの「楽しみ」とともにイノシシの肉は貴重なタンパク源となっていたのではないかと思います。

（町誌編さん室
竹原祐樹）

問 郷土資料館
☎ 0997-182
12908